ヘーシンゲーのモンゴル民族啓蒙思想について
——『奉天蒙文報（ムグデニー＝モンゴル＝セトグール）』を中心に——

ウユンゴワ

关于克兴额的民族启蒙思想
—— 以《奉天蒙文報》为中心 ——

乌云高娃

摘要

克兴额是蒙古民族著名的文学・教育・出版・翻译家。他为蒙古民族的发展和前途，做出了巨大的贡献。在中国内蒙古，额尔敦陶克陶、乌・苏古尔、巴・格日乐图、苏尤格、忒莫勒、克・莫日根等主要以克兴额的作品为中心进行研究。在日本，二木博史在《新发现的克兴额的作品》一文中专门介绍过在《奉天蒙文报》上新发现的克兴额的 13 篇作品，其中的 12 篇作品是尚未得到研究的新作品。但是，在上述先行研究中有很多不足之处。也可以说，就如今的研究现状而言，还没有一个人对克兴额进行过系统研究。本稿的目的在于通过对二木博史所发现的克兴额的作品进行分析，以阐述克兴额的民族启蒙思想。并对《奉天蒙文报》的内容也进行了简单的考察。克兴额注重教育，他认为一个民族的教育发展情况直接影响该民族的未来。他认为如果想唤醒受到近 300 年清朝愚蒙政策压制的蒙古民众，普及教育是最重要的手段。他认为只有教育才能挽救苦难之中的蒙古民众。他为民族的教育事业，为民族的早日强盛，为民族的未来回乡办学校，拿起笔写文章，创办出版机构。他的文章里表现出对当时社会的不满和对蒙古民众的无知而忧虑的心情。

はじめに
1. 問題の所在
2. 先行研究
1 ヘーシンゲーと『奉天蒙文報（ムグデニー＝モンゴル＝セトグール）』
1.1 ヘーシンゲーについて
1.2 『奉天蒙文報（ムグデニー＝モンゴル＝セトグール）』について
2 1918～20 年の内モンゴル東北地方の状況とモンゴルの知識人
3『奉天蒙文報（ムグデニー＝モンゴル＝セトグール）』に掲載されたヘーシンゲーの作品とその民族啓蒙思想
おわりに

はじめに

1. 問題の所在

ナショナリズムは20世紀の近代世界における国民国家建設に関わる大きな問題である。13世紀、チンギス・ハーンに指導され中央アジアを占領し、中央ヨーロッパにまで民族大移動を実現させたモンゴル民族にとって、20 世紀は歴史の舞台に再び出現する機会を与えたとも言える。

1911 年、辛亥革命の勃発を機にして、外モンゴルの王侯や僧侶たちはジェブツンダムバ・ホトクト 8 世を国家元首に戴き、12 月に独立を宣言した。このように辛亥革命を契機として、外モンゴルを中心とする独立運動に拍車がかかった。

1921 年、外モンゴルは中華民国の支配から離脱し、1924 年、モンゴル人民共和国が成立した（1992 年、モンゴル国と改称）。それは民族自決主義の名の下に行なわれたが、本質はソビエト・ロシアのモンゴルを支点とする極東共産主義化政策の具体化、緩衝国の設立であった。さらにそれはモンゴル工作を通じて日本の大陸侵略政策の遂行を部分的に阻止するものとなった。一方、中華民国の枠内に置かれた内モンゴル人は、モンゴルの振興をめざし、独立運動を高揚させた。20 世紀の世界情勢、中国情勢により、社会進化論が錯綜した経路で内モンゴルに浸透してきて大きな影響を与えたが、モンゴル人は同化される危険を強く感じた。そのために、モンゴル語教育・モンゴル文化教育活動の充実はモンゴル人に対する非常に重要な手段と感じられるようになった。モンゴルの開明的な王侯や知識人たちは、モンゴル人盛衰の歴史に鑑みて、モンゴル大衆の啓蒙教育、文化教育問題に力を注ぎながらモンゴル人の未来の発展の道を探索すべく努力しはじめた。

ところで、清朝はモンゴルにおける政治上の支配者である王侯を懐柔すると同時に、宗教保護政策を取り、チベット仏教を通してモンゴル人を精神的にも統治しようとした。清末新政期以来の近代的な文化の急速な進入は、モンゴル人たちに教育の必要性を痛感させ、モンゴルの文化・教育の発展のために学校の設立、図書出版など多方面での努力が始まった。覚醒したモンゴルの知識人たちは、モンゴルの文化・教育の発展を試み、モンゴルの振興と未来のため腐心した。本稿でとりあつかうヘーシンゲーは、モンゴルの文化・教育・出版事業をおこなった代表的な人物の一人である。

筆者はモンゴルの知識人ヘーシンゲーの活動を中心として、モンゴル民族ナショナリズムを研究の対象としてきた。本稿は *Mügden-ü mongγol sedkül*（『奉天蒙文報』）に掲載されたヘーシンゲーの作品を中心に、彼の啓蒙的なモンゴル民族思想についての筆者なりの考察を試みるものである。

2. 先行研究

ヘーシンゲーについての研究をみてみると、克・莫日根の『克興額―― 一个科尔沁蒙古人』[1]は、ヘーシンゲーの生涯と作品とを全面的、詳細に記述した最初の著作であり、高く評価すべきものである。同書は、ヘーシンゲーの生涯、東蒙書局（J̌egün mongγol-un bičig-un qoriy-a）の誕生の意義、モンゴルの文化・教育・出版事業などについて述べているほか、ヘーシンゲーの作品 19 編（詩歌 11 首、散文 8 編）と中国語からモンゴル語に翻訳した作品 14 編を収録している。同書はまた付録として、□色道尔吉[2]の「克興額及其作品（ヘーシンゲーとその作品）」[3]、□色道尔吉の「尹湛納希[4]和克興額（インジャナシとヘーシンゲー）――在

記念克興額誕辰100周年座談会上的講話」、□トゥィメル（忒莫勒）の「克興額考辨」[5]を収録している。

しかし、同書には誤りが目につく。これについてはトゥィメルの研究[6]がある。また、ヘーシンゲーの作品と関係する論文などの出典についても触れていないことから、同書は厳密な意味で学術研究書とは言えない。

またエリデニトクトフ（Erdenitoγtaqu）[7]、ウ・ショガラ（Ü・Šuγar–a）[8]、バ・ゲレルト（B・Gereltü）[9]、スユゥゲ（Süyüge）[10]の研究などがあるが、未開拓の部分も多い。日本では二木博史「新発見のヘーシンゲーの作品」"Sin–e–ber oldaγsan kesingge–yin bütügel"[11]はいままで研究者たちが発見していなかった12編の文章を初めて掲載した。『奉天蒙文報』の「論述文」(Sigümjilel ügülel)のコーナーに掲載されたヘーシンゲーの文章は長文という共通点があり、教訓色の濃い文章が中心になっている。一方、内モンゴルの研究者が収集研究していたヘーシンゲーの詩は短詩が中心となっており、著しい対比を見せている。以上の如き研究状況をふまえ、本稿ではヘーシンゲーの経歴と『奉天蒙文報』に載せた彼の作品を中心に、彼のモンゴル民族啓蒙思想について分析し、当時のモンゴルの知識人たちの思考の軌跡を一面から検討する。

1 ヘーシンゲーと『奉天蒙文報（ムグデニー＝モンゴル＝セトグール）』

1.1 ヘーシンゲー について

ヘーシンゲー（Kesingge 1889～1950年）、中国語表記では克興額、漢名は包存智、字は明遠、号して柏園と称する。内モンゴルの文学家・教育家・出版家・翻訳家であった。ホルチン左翼前旗に生まれ、ちょうど維新変法の年代に成長した。その時代は、中国各地に新たなる形勢が出現し、モンゴル地方も変法思想の影響を受け、興学活動が行われ、モンゴル各旗で新式学堂が設立された。光緒24（1898）年の戊戌変法を出発点とし、1901年の変法の詔の発布により、清朝は全面的な改革の方針を明らかにし、様々な改革を実施した。教育方面では、科挙に代わって学校教育を実施する教育改革などにとりかかったのであった。1902年、「欽定学堂章程」が発布されたのを機に、モンゴル地方の実情に合わせて「欽定蒙古学堂章程」が発布され、数年内に東部内モンゴル各旗に次々と数十箇所もの新式学校が立てられた。同時期、奉天市に奉天蒙文学堂[12]が設立され、貴族と富裕家庭の子弟に限られたが、生徒の募集がはじまった。

ヘーシンゲーは少年の時から勉強好きで、奉天蒙文学堂に入学する以前にすでに蒙、漢、満、蔵文を習い、ずば抜けた成績をおさめていた。1908年、ヘーシンゲーは奉天蒙文学堂に入学することになり、1911年には優等生として選ばれ、教師の代講を勤めていた。1912年、奉天市公署は教科書の編訳に際し、奉天蒙文学堂の優等生から人材を選ぶことに決めた[13]。その時ヘーシンゲーが選ばれて、東三省蒙務局翻訳委員および訳書員の栄徳の助手になり、翻訳編集員として『満蒙漢三体合璧教科書』（*Manǰu mongγol kitad γurban neyičetü utq–a–yin suryaqu jüil–ün bičig*）の編訳出版作業に参加した。『満蒙漢三体合璧教科書』は、実際は清朝政府学部審定の『初等小学堂教科書（漢文）』をマンジュー語とモンゴル語に訳し編輯したものである。これはヘーシンゲーがモンゴル教科書の編集事業と接触した端緒であり、ヘーシンゲーの一生の仕事に大きな影響を与えたと思われる。

ヘーシンゲーが奉天蒙文学堂で勉強していた期間は、ちょうど同盟会の活躍していた時期でもあり、ヘーシンゲーの思想に多大な影響を及ぼした。1912年、23歳の時、ヘーシンゲーは同盟会に参加して民主思想の洗礼を受け、モンゴル民衆に対する啓蒙教育の重要性を痛感するに至った。

1912年、ヘーシンゲーは奉天蒙文学堂を卒業し、専門編集員として奉天市翻訳書記(組織の責任者)として勤めていた。 しかし、ヘーシンゲーは教育の実践をめざし、1915年、安定した職業を離れ、家郷に戻り、ホルチン左翼前旗公立蒙漢小学校を創設した。ここでヘーシンゲーは生徒に知識を教えるだけではなく、民主主義教育、啓蒙思想教育をも行なっていた。新式学校の教育に合わせて新しい教科書が必要であった。これは後にヘーシンゲーが東蒙書局を建立した一つの要因になったと思われる。図書が不足していた当時、ヘーシンゲーは学校に「柏園書室」という図書室を開設

して、自らが奉天市から持ってきた本を図書室に置いて、生徒に思想教育を行なっていた。ヘーシンゲーはまだボヤンマンドフと相談して、英語の授業を増やしてみたが、これは教員の問題で続かなかった[14]。これら開明的なモンゴルの知識人たちは当時の社会に生まれた、以前とは違った新しいタイプのモンゴル人であった。

当時、ヘーシンゲーは文章を書き、モンゴル人の倫理的な資質を使い、モンゴル人の魂に呼びかけ、モンゴル人を滅亡の危機から救うと努力した（これについては、第三章では『奉天蒙文報』の「論述文」のコーナーに掲載されたヘーシンゲーの文章を中心に分析する）。

1920 年、31 歳のヘーシンゲーは学校を創立した開明的人物と認められ、国会衆議院候補議員となり、1922 年、衆議院議員になり、北京へ行き、徐世昌総統が辞任する時まで北京で政治に参画していた[15]。1923 年 1 月 26 日、孫文の和平統一宣言により、護法議員団が上海および江南各地を回り、護法運動を展開した。ヘーシンゲーは護法運動に参加して、中国江南の文化・教育の発展を目の当たりにした。かれはモンゴルの文化・教育が遅れていることを以前にも増して痛感した。

1923 年 10 月 5 日、大統領選挙の前夜にヘーシンゲーは国会議員の辞職を表明した。この辞職について、これまでの研究では、「清廉且つ開明的なヘーシンゲーが曹錕の賄選総統行為[16]に対して、投票することを拒否し、国会議員辞職を表明した」とみなしているが[17]、実は、これだけではなく、次のようないくつかの要因が、ヘーシンゲーの辞職を促したと考えられる。

第一に、ヘーシンゲーが地方の農民の苦労さを目の当たりにし、中国官僚の腐敗に失望したことがあろう。これは、当時彼が書いた作品の中に強く反映されている。例えば、「農民を哀れむ」"Tariyačin–i nigüleskü daγuu"という詩の中で、彼は「働かずに利益を得る官僚よ、食料の由来を知るべし。税金を課す官僚よ、農民の辛さを知るべし」（amur saγuǰu idegčid amu–yin irelte–yi medegerei, ür–e türiyesü abuγčid ündüsün ǰobaγuri–i medegerei）と述べている[18]。また、「警世詩」"Olan daγan sanaγulqu yariγ üges"には、「従順でいいなりになることを辞め、時機と情勢を観察すべし。甘言を弄することにだまされるな、大衆を誑かすことや官僚の詐欺に警戒すべし」（büküin taγalalčan tadaγalǰan bolγomǰilaqui－yi oγorču ,töb üiles–iyer degedüs–ün ner–e–yi aldarsiγulbasu ǰokimui, uran arγ–a eldeb meketen–ü bačilan genetegülküi–yi sergeyilen seremǰilebesü ǰokimui）と語っている[19]。

第二に、中華民国政府の対モンゴル政策、内モンゴル王侯の現実への対応は、ヘーシンゲーの信念とは合わなかったためである。清廉なヘーシンゲーは、本来、中華民国政府の対モンゴル政策と自分の利益だけを考えるモンゴル王公とに対して不満を持っていた。彼の書いた「モンゴル王侯」は次のように述べている。

モンゴルの王侯は庶民の血を吸う悪魔であり
政府のわなにかけられた腐った魚にすぎない
王侯は悲しむべきだ
君たちの醜態を目の当たりにして
モンゴル人として、僕は怒り恨み
気を塞がねるばかりだ[20]。

第三に、ヘーシンゲーは政治だけでは遅れているモンゴル人を救うことができず、文化・教育を普及させて、モンゴル大衆の思想認識を向上させることこそ、モンゴル人の希望であると覚悟したことである。

これらのことこそ、ヘーシンゲーが国会議員を辞退した原因であると思われる。

ヘーシンゲーが国会議員を辞した後、ハラチンの李致庵（字は詣南）なる者がヘーシンゲーの名前を騙って国会議員となり、のちに中国国民党に参加して 1929 年、1931 年前後に中国国民党第三回、第四回候補中央執行委員になったことがある。1994 年に、内モンゴル図書館研究員トゥイメル（Tüimer）は「克興額考辨」という論文を発表し、ホルチン＝ヘーシンゲーとハラチン＝ヘーシンゲーについて詳しく述べ、研究者たちの誤りを指摘した[21]。この李致庵は蒙蔵問題について文章を書いたことがあり、モンゴル文化の事業にある程度の貢献が認められるものの、李致庵には自己中心的な政治的・経済的上昇志向があり、無私の心境でモンゴル人の文化・教育・出版事業に貢献したヘーシンゲーとは全く人生観が異なっているといえよう。

ヘーシンゲーは 1926 年の秋、奉天市[22]へ戻り、東蒙書局を創立した。1927 年から書籍を編訳、出版してそ

の活動が始まった。東蒙書局はその創立から1931年の満洲事変による活動停止に至るまでの短い期間に、モンゴル語の文史類図書・参考書・教科書などを出版し、のちの内モンゴル文化・教育・出版事業に大きく貢献した[23]。

東蒙書局から出版された『初学国文』(*Angqan suryaqu ulus-un utq-a*) は『満蒙漢三体合璧教科書』の内容を基礎として、編集したものである。この『初学国文』編集の際に、ヘーシンゲーが利用していた『満蒙漢三体合璧教科書』（第1、第2、第3、第4、第5冊）が現在、内モンゴル図書館に所蔵されている。この『満蒙漢三体合璧教科書』の第2冊の表紙に、「6月16日の相談後、国語十冊[24]の中から適当な内容を選択し、八冊[25]として編集することに決定した。第一冊はモンゴル語の基準語から新しく編集し、モンゴルの習慣に合わせる」（ǰiryuγan sarayin arban ǰiryuγan-a kelelčeǰü toγtaγsan anu, arban debter ulus-un utq-a-yi naiman debter bolγan ǰokiyaǰu, dotorača abqu gegekü-yi ǰokis anu üǰiǰü ǰokiyamui, terigün debter-i a ba qa eč ekilen sin-e ǰokiyaǰu, mongγol-un ǰang surtal-dur neyilelčekü-ber kelelčen tobkimui）とモンゴル語で書かれてある。これはヘーシンゲーの直筆メモである。ヘーシンゲーの使っていた『満蒙漢三体合璧教科書』の本の中にもヘーシンゲーの直筆のメモがあり、モンゴルの歴史文化を紹介するために腐心していた様子が見受けられる。『満蒙漢三体合璧教科書』第3冊第19課は「宋太祖」(Süng tai jü) であるが、このページの上に「チンギス・ハーンに変更」(Činggis qaγan-iyar qalasuγai) というメモ書きがあり、『初学国文』を見ると「宋太祖」が消えて、「チンギス・ハーン」(『初学国文』第3冊第41課）が挿入してある。また『初学国文』第3冊40課には「モンゴル国」(Mongγol ulus) という文章が入れられている。それは、次の如くである。

「我々のモンゴル国はアジア州の東部にあり、気候温暖にして広大、民衆の体格は頑丈で、地球上の有名な歴史のある国である。現在文化・教育は遅れているものの、言語・文字が発達しており、努力すれば最終的に文明国と肩を並べられないわけではない。われらの祖先が歴史を切りひらき、この地に生きて子々孫々が続いて今日の我々がある。我らはモンゴル人なのだ。モンゴル民族を愛さないことがあるだろうか。」(以上筆者訳)

『初学国文』と『満蒙漢三体合璧教科書』の内容を比較して見ると、ヘーシンゲー、ロルガルジャブ[26]の二人[27]はモンゴル民族の伝統文化や歴史、モンゴル民族意識、啓蒙思想に関係がある内容に力点を置いていたことが窺われる。

1928年、東蒙書局を基礎に蒙古文化促進会というモンゴルの知識人の団体が組織され、その蒙古文化促進会の事務室が東蒙書局の事務棟に設置され、メルセーが事務局長となった[28]。蒙古文化促進会の会章には、「モンゴル民族文化・教育を促進することを主な目的として、各盟旗の文化・教育事業を建議し、モンゴル民族の文明建設を促進する。心血を注いで東蒙書局事業を賛助しモンゴル図書の編集、出版事業を発展させる」と書かれている[29]。蒙古文化促進会の設立後、奉天蒙旗師範学校創立が建議されて、1929年、奉天蒙旗師範学校が創立された。メルセーが校長となり、ヘーシンゲーはモンゴル語の教師を兼任していた。

1932年、満洲国が建立され、興安局が設置された。興安局はその後興安総署に改称され、1934年には興安総署が廃止され、蒙政部が成立した。蒙政部民政司文教科にはモンゴル教科書編審官が設けられ、教科書の編纂や出版、教育資料審査を担当した。ヘーシンゲーはその編審官に任命された。科員にはジルムト（J̌irumtu）、ハワンジャブ（Qawangǰab）、ボヤンツァン（Buyansang）、チョロー、岸田蒔夫、三原増水らがいた[30]。彼らを中心にモンゴル教科書編審委員会が組織され、『蒙語算数』(*Bodoqu yoson-i suryaqu bičig*)、『蒙語自然』(*Aqu yoson-i suryaqu bičig*)、『蒙語国民読本』(*Mongγol kelen-ü ulus-un arad-un ungsiqu bičig*) などの教科書が編集、出版された。これらの教科書の出版にしたがい、それまで使われてきた満洲国建国前に東蒙書局が出版したモンゴル語の教科書が廃棄され[31]、モンゴル教科書編審委員会の新しい教科書が採用された[32]。

1938年の秋、満洲国政府は蒙旗が開放地区に納税局を設立したことが、徴税の妨げになるという理由でモ

ンゴル王侯に蒙地を奉上[33]させ、開放蒙地の所有権を国に一元化して、その代わりに「厚生資金」を蒙旗に交付した。当時のモンゴルの知識人（さらには蒙旗各級の官吏を担当していた知識人たち）は、旗民たちにも蒙地の所有権が有ると考え、「厚生資金」の一部分は社会福利事業を振興するために使えるようすることを主張した。そこで1939年9月9日に満洲国政府は王爺廟（今のオラーンホト市）で、モンゴル人の貧、病、愚を改善する蒙民社会福利事業的な組織である蒙民厚生会[34]を設立した。当時の状況から、ヘーシンゲーは蒙文編訳出版機構を創立することも可能になった事情を知り、1940年に蒙民厚生会へ蒙文編訳館（Mongγol bičig-iyer ǰoqiyan orčiγulqu küriy-e）を創立する意見書を提出した。1941年、蒙民厚生会の許可を受け、蒙民厚生会と蒙民裕生会との共同協力の下、新京（今の長春）で蒙文編訳館（1943年に王爺廟へ移転）が蒙古会館内に設立された。ヘーシンゲーは蒙文編訳館の館長として、また編訳、審定について担当した。蒙文編訳館は『蒙文補助読本』(*Mongγol utq-a-yin nökübüri bičig*)[35]、『初学文鑑』(*Toγtam suruγčid-un toli bičig*)、『常識百題』(*Eng-un medel-ün ǰaγun sedüb*) など数多くの図書、そして『真珠の数珠』(*Subad erike*)（再版）などの年代記も出版した。

『蒙文補助読本』は上下2冊で、ヘーシンゲーの作品7編が収められている[36]。それは、祖先の栄誉、現在モンゴルの文化・教育が遅れている原因、モンゴルの文化事業の貢献者、文化知識の重要性、満洲国政権とモンゴル人などモンゴル人と関わる内容で、モンゴル人学生たちに強固な意志を以て勉学に励むことを奨励している。

1.2 『奉天蒙文報（ムグデニー＝モンゴル＝セトグール）』について

『奉天蒙文報（ムグデニー＝モンゴル＝セトグール）』は1918年8月10日から1920年夏まで奉天（現在の瀋陽）で週一回出版されていた。この新聞の名前は北京で出版された『中国蒙古文古籍總目』[37]には記入されておらず、中国では1号も残されていなかったが[38]、日本の大阪外国語大学(現・大阪大学)の図書館に、数多くの『奉天蒙文報』が保存されていることが分かった[39]。1918年頃、ロシア側からハルビンで出版された『モンゴルの新聞（モンゴリーン＝ソニン＝ビチク）』に対抗すべく、中島真雄が『奉天蒙文報』を出版した[40]。

『奉天蒙文報』の第43号に、「ハルビンの蒙文報社から送ってきた原稿をそのままに掲載した」という説明を付けた文章[41]がある。

二木氏は、『奉天蒙文報』の名前が内モンゴルの人々に忘れられたのは同紙が日本人の資金援助で出版されていたことと関係する可能性があるが、しかし新聞の内容から見ると同紙は必ずしも日本の政策を礼賛しておらず、実は『奉天蒙文報』には日本を暗に揶揄した論文も発表しており、ヘーシンゲーの論文はちょうどこうした内容であると指摘している[42]。そのヘーシンゲーの文章を読んでみると、モンゴル人の啓蒙教育、モンゴル人の未来に心を痛め、モンゴル民衆を覚醒しようと努力していたことが最も注目される。これが当時のモンゴルの知識人の共通点でもあると言えるだろう。

『奉天蒙文報』は毎週土曜日に発行され、論述文とニュース報道が中心になっている。編集者は菊池真二、タイピストは米田喜平で、日本人が発行していたモンゴル語の新聞である。ボヤンマンドフが奉天（瀋陽）でモンゴル語新聞の編集に従事していたことはこれまでも言及されたことがあるが、二木氏は中島真雄の回顧録[43]により、新聞自体には「発行兼編輯人」として菊池真二の名前しか印刷されていないので確認はできないけれど、ボヤンマンドフが『奉天蒙文報』の編集者として勤めていたことは間違いないであろうと指摘している[44]。忒莫勒氏は「民国年間蒙古人士在瀋陽的文化活動」のなかで、『奉天蒙文報』の編訳人はボヤンマンドフ、ヘシグトなどがいましたと指摘している。ヘーシンゲーとボヤンマンドフはホルチン左翼前旗出身で、1908年、二人はビント王ゴンチグスレンの弟の「侍読生」（御学友）として奉天蒙文学堂に入学した竹馬の友である。1915年秋、ヘーシンゲーが西ジャハチ村にホルチン左翼前旗公立蒙漢小学校を創設すると、ボヤンマンドフは1917年頃までそこで教師をした。満洲国時期も、ヘーシンゲーとボヤンマンドフの二人はモンゴル人の教育事業の発展のために協力しながら努力を続けていた。例えば、1942年5月11日から13日

まで王爺廟で3日間にわたって開催されたモンゴル語教育方法討論会である[45]。また、ボヤンマンドフは『奉天蒙文報』の編集長として勤めていた時も、ヘーシンゲーはモンゴル人を啓蒙しようと熱心に文章を書き、ホルチン＝ヘーシンゲー（Qurčin Kesingge）、ビントーン＝ヘーシンゲー（Bingtu-yin Kesingge）という名前で『奉天蒙文報』に発表していた。ボヤンマンドフもボルジギト・ボヤンマンドフ（Borǰigid Buyanmanduqu）という名前で文章を発表している[46]。以下、『奉天蒙文報』の一部分を例として具体的な内容から見てみたい。

第38～40号を例としてみる。第38号は全8頁で、第39号と40号は7頁である。第1頁の始めは「論述文」のコーナーであり、民衆の啓蒙教育に向けた文章が中心になっている。ヘーシンゲーらモンゴルの知識人たちもこのコーナーを中心に投稿し、民衆に呼びかけ、啓蒙、教育し、モンゴル民族意識を高揚すべく努力した。具体的な内容については後述する。第38号の最後の1頁は在奉天の日本の株式会社、商業支店、銀行支店[47]について紹介した広告であり、他の『奉天蒙文報』を見ると、8頁立ての場合は最終頁が同じく広告であった。例えば第45号も全部で8頁あり、この中の五つの広告は第38号と全く同じ体裁である。ただ、内容には異同があり、在奉天の朝鮮銀行支店と日本赤十字病院の新しい広告が増えているが、38号に載せていた広告[48]が一つ無くなっている。これにより、最後の第8頁は広告のコーナーであったこと、さらに広告により第8頁の有無が左右されていたことがわかる。

『奉天蒙文報』は大体7頁立てものが多く、その紙面構成は皆「論述文」のコーナーで始まり、続いて国内外のニュースがあり、記事の長さと数、さらに編集者の都合により頁の数が決められていたようである。例えば、第47号では全部で3頁であるが、第1頁の「論述文」のコーナーはヘーシンゲーの「警世詩（Olan daγan sanaγulaqu yariγ üges）」という文章、これに続き、北京、外モンゴル、上海に関するニュースが4件、第2頁は「内外重聞（Dotoγadu γadaγadu-yin čiqula sonosqal）」というコーナーで、モンゴルに関係するニュースを中心に4つの記事を載せている。最後の第3頁は「全聞（Aliba sonosqal）」というコーナーで、当時の奉天と吉林の軍事に関係するニュースを5件載せてあり、また日本関係のニュースも1件載っている。また執筆者の健康上の理由により「内外重聞」とコーナーは1頁しかできなかったと表明している。最後に「はっきり聞かせる（Todorqai sonosγaqu anu）」という短文では『奉天蒙文報』の投稿内容が書いてある。具体的には、「意志を同じくする知識人は『奉天蒙文報』の発行を喜び、同紙を支持するに当たって、我々のモンゴルに利する論述文およびモンゴル地域にどのようなニュースがあるのかを書いて投稿することが、民衆の知識を増やし、同時に苦悶を解するのにも役立つ」と述べている。具体的な例として上述のように筆者が分析した第38～40号にもこの文章が載っており、投稿者は民衆に関心を持つ知識人であることが窺いれる。また、『奉天蒙文報』の第1頁で「論述文」のコーナーが同様に巻頭に掲載されていることにより、この新聞は当時のモンゴル人の啓蒙教育、民族意識の提唱に重要な役割を果たしたと言える。

2 1918～20年の内モンゴル東北地方の状況とモンゴルの知識人

清朝は1906年から官制改革を行い、理藩院を理藩部に改めて、モンゴルに対しても新政策を実施し、新たな行政・軍事・経済・教育などの機関を設けることによって、モンゴル旧来の社会構造を改革し、中国の過剰な人口をも引き入れて積極的にモンゴル地域の開発を進めようとした。またそれにより日本・ロシアの進出にも対抗しようとしたのである。

周知のように、辛亥革命以降、中国の最も重要な課題の一つは専制王朝システムを近代的国家に改鋳することであった。結局、専制を否定して近代的・先進的国家体系に改変することと、領域の統合＝版図の維持はゼロ・サムゲーム的に一つのジレンマになっており、これにはもちろん少数民族問題が含まれている[49]。

中国における国民国家構想の本格的な実施は20世紀初頭のいわゆる清末新政期に始まるものとされている。西欧世界と接触や摩擦によって刺激された中国が、世界の基準に追いついて生き残るために必死になって国民国家を構想し、その実現を模索していた。中国自身を中心とする外交システム（冊封体制）は日清戦争の敗北をもって完全に崩壊し、近代国際関係のな

かに包摂されるに至った。そして、中国各地には租界や租借地が形成され、少数民族が居住する「辺境」にも列強の進出が顕著になり、かつ列強による勢力圏が設定されるなど、「瓜分」の危機が急速に高まったのである[50]。

1912年1月、孫文の南京臨時政府教育部は、普通教育暫定法則と普通教育暫定課程標準を制定し、新しい教育制度・教育内容・教育原則と方法等を定めた。この下にはモンゴル・チベット教育部も設置された[51]。当時、開明的なモンゴルエリートたちがモンゴル人の学校を設立し、モンゴルの学校教育の発展をめざしたのである。

辛亥革命以前、清朝はモンゴルにおける政治上の支配者である王侯を懐柔すると同時に、宗教保護政策を取り、チベット仏教を通してモンゴル人を精神的にも統治しようとした。漢文化の浸透以来、モンゴル人たちは教育の必要性を痛感し、モンゴルの文化・教育の発展のために学校の設立、図書出版など多方面から努力して、文化・教育の発展を試み、モンゴル人の文化・教育水準の向上と未来のため腐心してきた。

前述の如く二木氏の発見したヘーシンゲーの作品は、前述したように、彼が安定した職場[52]を離れ、故郷へ戻って学校を創立し、教育事業に携わっていた時に書かれたもので、それらの文章からは当時の社会情況下での一人のモンゴルの知識人の努力と思想が窺われる。以下検討することにしたい。

日本人の資金で出版されていた『奉天蒙文報』をヘーシンゲーとボヤンマンドフらは積極的に活用し、モンゴル人の啓蒙教育に利用し、モンゴル民族意識を昂揚させようとした。『奉天蒙文報』の「論述文」のコーナーに載せられた文章、いずれも民衆の啓蒙教育を重視した垂訓的な文章であり、モンゴルの未来を意識して、民衆を呼び起こすと努力した本心の声である。

3 『奉天蒙文報（ムグデニー＝モンゴル＝セトグール）』に掲載されたヘーシンゲーの作品とその民族啓蒙思想

『奉天蒙文報（ムグデニー＝モンゴル＝セトグール）』にヘーシンゲーは数多くの作品を発表し、モンゴル人の啓蒙教育に対して熱心に、力を注ぎ努力した。二木氏はこれらの作品 13 編を纏めて、(1) 叙情詩（uyangγ–a–yin silüg）、(2) 詩式論述文（silüg–ün kelberitü sigümǰilel）、(3) 寓言論述文（yoγta sigümǰilel）、(4) 教訓（surγal）、(5) 評論（sigümǰilel ügülel）、(6) 翻訳（orčiγulγ–a）と6種類に分け、原文をそのまま載せ、簡潔に分析している。「無題」"Sula bičigsen anu"[53]以外の12編は全部新しく発見された作品である。

『奉天蒙文報』で発表されたこれらの作品は当時のヘーシンゲーの思想を研究するための貴重な資料である。さらにこれらの作品から、当時のモンゴルの知識人たちの思考の軌跡を窺うことが可能である。

以下で、これらのヘーシンゲーの文章から四つを選び、具体的に分析してみる。

3.1 「狂言」[54] "Tösöge ügei ketüremekei üges"

二木氏はこの文章を詩式論述文（silüg–ün kelberitü sigümǰilel）と命名し、この文はQa「ハ」で始まり、ltai か ltei「リテ」で終わる28行詩である。1行が7語から成る興味深い詩でありながら当時の社会矛盾を浮き彫りにしており、ヘーシンゲーはモンゴルの古語から現代にも通じる同義語を注意深く探り出し、これらの言葉の微妙な綾を織ることが出来る特殊な才能を世に示したのである、と指摘した。

以下、「狂言」"Tösöge ügei ketüremekei üges"の具体的な内容について分析したい。

Qauli dürim dalda oruǰu sularan gegegdegsen γuniyaltai
Qaquuli ed ile γarču dasun toγtaniγsan γuturaltai

賄賂に左右され、法令が弱くなり、権力者が腐敗した当時社会の現状を風刺している（大意）。

Qarkis bildauči erke–yi temečegsed neng arbiduqu γasalaltai
Qataγu möljimtegei alban–iyar amiduraγčid ulam
nemegdekü γasiraltai

権力を求める人たちのなかに、ずるい・悪い人が最

も多くなり、公的な金に頼って生活する権力者のなかにも悪い・腐敗している人がさらに多くなっている現状に心を痛めている（大意）。

Qamtuda nigedčü bütügeküi–yi čirmaγčid čöken sonosdaqu sonirqaltai
Qaradan maγusiyaǰu ebdelküi–yi kičiyegsed olanta üǰegdekü sočiltai

成功のために皆で力を合わせて努力しようという人たちは少なくなり、逆に恨みを持ち邪魔する者が多くなっていることに驚いた（大意）。

Qaraču tayiǰi–yin asiγ tusa–yi ülü qayiqurqu emiyeltei
Qariyatu arad–un alban γubčiγuri–yi neng čingγalaqu emgeniltei

庶民の利益を全然考えず、彼らに対する税金をさらに増やす当時の社会の現状を述べ、庶民の生活は更に困窮した、と心を痛めた（大意）。

Qaγan eǰen–u……basaču eregelǰekü tačiyaltai
Qalan ǰasaqui–yi …yi egenegte čibqaγuraqu γomodaltai

Qaγan eǰen（皇帝）とはモンゴルのジェブツンダムバ・ホトクト8世を指していると思う。1911年、辛亥革命の勃発を機にして、外モンゴルの王侯や僧侶たちはジェブツンダムバ・ホトクト 8 世を国家元首に戴き 12 月に独立を宣言したことで、Qaγan eǰen（皇帝）と言っていると思われる。Qaγan eǰen（皇帝）がなかなか決心できずにいることに焦り、改革を積極的に行なわないことについては遺憾であると述べている。

Qar–a sedkilten–ü sür kikü–dür eǰelegden daruγdaγsan ičinggüreltei
Qari ulus–un γamsiγ ǰobalang–dur nerbegdekü oyiraturγsan ukilaltai

悪人の強勢により、占領鎮圧されたことは恥ずかしいことである、と内モンゴル東北部が張作霖政権の下に入ったことを指し、モンゴル人が他人により困難に遭うようになったことは涙を流すほどである、と漢人の開墾によりモンゴル人の生活が苦しくなる現状に心を痛める。一方で、この有様であれば遠からず外国の侵略を受けるだろう、と危惧し、危険なモンゴルの社会環境を述べる（大意）。

Qamuγ kereg–tür qoromǰi–yi idekü tongniγun bayidal uyaraltai
Qamiγ–a kürübečü doromǰilan γoloγdaqu neyite–yin činar tenčigüreltei

物事に対していつも損しているモンゴル人の無知な状態に心を痛め、どこへ行っても虐められる悪い習慣を皆直すべきだ（大意）。

Qaγučin–iyen erkimlen sin–e–yi tebčikü bükün–ü sanaγ–a qasiraltai
Qaγurmaγ–tur bayasun ünen–i gegekü olan–u sedkil aγurlaltai

進歩的な物事を受け入れず、古い見方ややり方に固執する皆の考えは飽きるぐらいである、表面的なみせかけの好意に騙され、真実な物事を失う皆の無知な心こそ本当に怒られるべきだ（大意）。

Qasi yasi teǰigekü mal aduγu baγuran baraγdaqu begdereltei
Qaγas quγus tariqu tariy–a tömüsü qumsadun šuγuruqu ǰobaniltai

勤勉に働かず、家畜と耕作による収穫が段々少なくなることは悔しいことである（大意）。

Qaγurai amu ǰil buri dutaqu amidurałγ–a–yin bodolγ–a qorosoltai
Qalaγun darasu edür tutum küičeltekü tasuγsan ǰang süsügleltei

毎年の食物が足りず生活に頭を痛めるのがくやしいのに、酒が毎日足る習慣には感服する、と述べ、食

物が足りない生活なのにお酒を毎日飲む人たちを風刺し、良い生活習慣の大事さを強調している。

Qanul ügei kičiyen abalaγsaγar mungqaran ǰerligsikü ǰigsiltei
Qatuǰil ügei bayingγu saγuγsaγar ügegüren turaqu basumǰilaltai

モンゴル人は昔の狩りをするなどの単純な生活方式ではいけないことを強調し、社会進化論の側面から逆説的な言い方を使って、モンゴル人は元気を出し、立ち上がるべきことを暗示する。

Qarangγui–yi gegedgekü erdem surtal–i ülü erkimlekü ǰanultai
Qangγal–i güyičegekü ede aγurasun–i talaγar süyidgelčekü qayiralaltai

モンゴル人が文化・教育を重視していないことはくやしいことであると述べ、社会発展に文化・教育知識が欠かせないことを強調し、さらに豊かなモンゴルの資源を無駄にするなという（大意）。

Qadan tasurqai uruγsi siγuduγčid čuqaγ boloγsan isbeljiltei
Qašang muquda γ qoyisi uquriγčid ülemǰi nemekü bokinidultai

堅い決心をもち前向きの者が少なくなり、畏縮して尻込みする者が多く増えたことは気が減ると述べ、チンギス・ハーン時代の勇気を持つモンゴル人がこんな弱くなった現状に悔しい気持ちを表す（大意）。

Qayiralan bodoǰu mongγol–iyan ergügčid üsed baraγdaγsan ükedgeltei
Qamaγalan sanaǰu ayimaγ kemen bodoγčid tasu čökedtögsen kögerököileltei

最後で、かれはモンゴルのためを考え、モンゴルを支持し、モンゴルを愛護する人が少なく、衆寡敵せぬすがたは慚愧に堪えない、と結んだ。ヘーシンゲーはこのようにモンゴル人の弱点を述べながら、モンゴル人を啓蒙し、モンゴル民衆を教育し、モンゴル人の覚悟の振興を目指したのである。

この作品は詩の形で書かれた教訓的な内容の文章であり、教育・啓蒙によりモンゴル民族を救いたいというヘーシンゲーの悲願が痛切に伝わってくる。彼は腐敗した当時の社会に不満を持つ気持ちを強く表現し、己の利益しか考えない上流社会の人々と目の前のことしか見えない無知蒙昧な民衆を共に叱咤した。彼は新しい知識を受け入れること、団結すること、勤勉に努力すること、進歩向上する精神の力が当時のモンゴル民衆に欠けている事実を指摘し、モンゴルの未来に心を痛め、民衆の啓蒙教育によりモンゴルの振興を目指すべきだと世に訴えたのである。二十世紀前期の内モンゴル社会で、モンゴルの知識人たちは教育により民衆の心を呼び醒まし、覚醒させる事によって、モンゴルの振興を目指したのであるが、啓蒙教育に関係するこうした作品は彼ら訴えの重要な武器の一つであった。

3.2 「Kümün（人間）と kümüǰimüi（教育を受けさせる）という二字の関連を論じる」

“Kümün kümüǰimüi kemekü qoyar üsüg–ün qolboγdal–yi sigümǰilegsen anu ”[55]

「kümün（人間）と kümüǰimüi（教育を受ける）という二語の関連を論じる」“Kümün kümüǰimüi kemekü qoyar üsüg–ün qolboγdal–yi sigümǰilegsen anu ”という文章の内容を翻訳すると以下のようになる。

動物の中で知恵が優れたのを kümün（人間）と言う。kümün というモンゴル語を研究してみると、教育を受けて人間になる kümüǰimüi（教育を受けさせる）という語から生まれたことがわかる。このようにしてつくられた深い意味を研究してみると、kümün（人間）は褒められることによって発展するが、一方において kümün（人間）は衰退して他の禽獣の仲間に堕ちる事を恐れるのだ。これによると、kümüǰin（教育を受けさせる）することができてこそ、はじめて kümün（人間）

になるのである。kümün（人間）になりたかったら、是非とも kümüjikü（教育を受ける）すべきである。kümüjikü（教育を受ける）という意味は大小二つの意を含む。一つは、孝行・正直であり、知恵・能力を得、国のために努力する力を完成し、得る権利を失わず、自分らを安定させ、他人におべっかを言わないことで、これが小 kümüjilge（教育）である。もう一つは、親戚民族などと仲良くし、国内外の人々とも皆お互いに愛し合い、教育を発展させ生きている皆の役に立ち、世界中に真理を表す、これが大 kümüjilge（教育）である。これらを段々完成するようにし、歩くたびに努力すれば、その人は kümün（人間）と命名されても名に恥じることがなく、kümün（人間）という意味を汚していないとはじめて言えるのである。このようなレベルを持つ人達が皆合流すると、社会はダイヤモンドや金の細かい滓が溶け合ったようになり、発光して、価値の高いものになる。そのことを追慕する者も多くなり、虐められることはなくなるはずである。しかし、kümün（人間）になるための kümüjilge（教育）を誤解し、真理を捨て、恥を忘れ詭計を使い、人から財物を手に入れようと追求し、おべっかを言って名を騙り、とりわけ己の欲だけを考えるようになって、これを kümüjikü（教育を身につける）とすると、kümün（人間）という意味では恥だ。こいう低いレベルに安居するものは･･･砂の纏まりと同じである。どれほど合流しても･･･kümüjikü（教育を受ける）の本質である支える力と尊敬される能力が無いために、最後は本当に人間らしさの kümüjilge（教育）をつくりだすことが出来ず、皆に負け、壊されて身を滅ぼすのだ、金のようにならないのが当然だ。これが kümün（人間）と kümüjimüi（教育を受けさせる）という二字の関係だ。我々モンゴル民族の年寄りの兄弟たち、賢い先生たち、或いは偉い学者たちが皆この意味を理解して、良いと賛成して、皆で立ち上がって、一生懸命努力すれば、天国のような幸せは目の前にある。そうでなければ、kümürimüi（被せる）より生まれた kümün（人間）になるのがもうまもなくのことだ。地獄に堕ちることが近くなり、奴隷になる恥を受け、権力に kümürigdeküi（被せられたもの）になるのだ。この二字[56]のどちらから生まれた kümün（人間）になることを、モンゴルの皆はよく考えて熟慮した上で、一心を持ち努力しましょう。

この文章は、第一に、ヘーシンゲーが人間としてもつべきことを知恵・団結・真理などの多方面から強調しながら、人間と教養の深い関係を中心として、知識と教育を受けるべきものとし、真理を追求して努力するべきだという自分の考え、思想を表している。ヘーシンゲーは人間として教育を受けることを正面と反面から論述しながら、最後にこの問題は当時の民衆に対して、本当に深刻であることを論じ、当時の民族の危険な状況を暗示し、モンゴル民族の未来のために教育を重視して、皆で力を合わせて努力しようと呼びかけている。行間から常々教育を重視しているヘーシンゲーの悲憤慷慨ぶりが窺われ、民族の未来に対する憂慮が読み取れる。彼はひたすら教育に力を入れ、これにより民族の再興をめざしたのである。文中でヘーシンゲーは民衆が教育を受け、一致団結して奮闘すべきことを強調し、それが、モンゴル民族が同化併呑される危険から救うのだと呼びかけた。モンゴル民衆は本気になって kümün（人間）として kümüjimüi（教育を受けさせる）して、kümürigdeküi（被せられたもの）の運命から飛び出すべきだと強調した。換言すれば民衆が教育を受けて努力しなければ kümürigdeküi（被せられたもの）により同化される恐れがあると暗喩したのである。第二に、この作品はモンゴル人の祖先が持っていた根源的な思想を汲みとげたものであり、モンゴル人的な文化の作品でもある。ヘーシンゲーはモンゴル人の祖先の思想によってモンゴル民衆の魂に呼びかけ、モンゴルを危機から救い、振興させよう努力した作品であるといえよう。

二木氏は、教育に対するこの論述文はヘーシンゲーが小学校校長時代に教鞭を執っていた頃の文章で、文中には儒教と仏教の世界観が現れているものの、基本的には教育を最も重視する進歩的な思想が中心になっていると述べたが、私見では、儒教と仏教の世界観というよりもモンゴル人の祖先たちが元来持っていた人生観が現れているものだと思う。これにより、モンゴル民衆を啓蒙し、教育しようとしたのである。

この文章を、スユゥゲ（Süyüge）は『モンゴル族現

代文学史（上）』（*Mongγol ündüsüten–ü odo üy–e–yin utq–a jokiyal–un teüke,* Öbör mongγol–un yeke suryaγuli–yin keblel–un qoriy–a, 2008）のなかで、nayiraγulul（随筆）と命名し、分析している。スユゥゲ氏は、この文章は一つの道理をはっきり論じて、人々を教育する目的で書かれた文章であり、啓蒙の動きが大きく、論述性が強く、裏と表からの論述を上手く使い、言葉使いがよく、論理と実践の役割を持ついい作品である、と述べた。二木氏はこれを sigümǰilel ügülel（評論）と命名したが、筆者はこの文章を sigümǰi nairaγulul（論述的随筆）と言った方がもっとも適当であると考えている。

3.3 「モンゴル民族の年寄り兄弟に聞かせる——この数年間の我々モンゴルへの奇妙な誉め言葉」

"Mongγol ayimaγ–un nasuǰiγsan aq–a degüüner–tü sonosqaqu ene kedün on–u dotoraki man–u mongγol–un γayiqaltai maγtaγal arban anggi" [57]

「モンゴル民族の年寄り兄弟に聞かせる——この数年間の我々モンゴルへの奇妙な誉め言葉」"Mongγol ayimaγ–un nasuǰiγsan aq–a degüüner–tü sonosqaqu ene kedün on–u dotoraki man–u mongγol–un γayiqaltai maγtaγal arban anggi"は、当時の社会の多方面のことがらを風刺し、逆説的に自分の考えを表した作品である。二木氏は、この作品は社会・政治・財政の諸方面の弱点を風刺し、叱ったものだと述べている。本文の大体内容を翻訳し、分析すると以下のようである。

一、国（中華民国）に重視されている。これが一番目の誉め言葉。

中華民国には五族共和政策で民族平等を強調しているが、しかし、ヘーシンゲーはこれを全く額面通りに受け取っていない。その自分の意識を暗に示し、自分の考えを述べている。

二、モンゴルは外国（ロシアと日本）と友好関係にある。これが二番目の誉め言葉。

ヨーロッパではロシア皇帝がモンゴルを財政援助し、影響力を増すよう暗躍している。アジアでは覇道を進む日本が東モンゴルで学校を設立し、雑誌を出版するなど、知識の増強に努力していることは賛美すべきである。そのモンゴルへの援助の裏には別の目的があることを民衆に悟って欲しかったヘーシンゲーの気持ちが強く出ている。

三、モンゴルに英雄が出た。これが三番目の誉め言葉。

ジェブツンダムバ・ホトクトが国王の座に着き、健智な王侯はフレー（現在のウランバートル）に集い、世界戦争の名前を聞き、最後に独立を勝ち得たのは賛美すべきことだ、と言いつつも、外モンゴルが独立後も実はロシアの権力下にあることに心を痛めていることが読み取れる。

四、モンゴルは仏教[58]を保護している。これが四番目の誉め言葉。

宗教の革新会を設立し、皆と戒律を改革することで、表面上嬉々としているが、実は古い戒律をそのまま墨守しただけであることを述べ、民衆の建前上の変化に目を奪われやすい傾向に警鐘を鳴らしているのである。

五、時流にうまく乗っている。これが五番目の誉め言葉。

かつて地方のタイジ（台吉）が清朝時代に辮髪したように、官僚は意気揚々として新式に合わせて髪を切り「文明開化」は順調に進んだ、と述べているが、実は時流に流されているだけのモンゴル王公たちを風刺しているのである。ヘーシンゲーのモンゴルの伝統文化を保護することに留意するべきだという意識が潜んでいるといえるだろう。

六、座ったままで幸福の扉が開いた。これが六番目の誉め言葉。

シベリア（鉄道）、南北鉄道、貿易（商売）の輸入が多くなり、イギリス・ロシア・日本はモンゴルの藩屏となったように見えるが、逆に危険が近づいたことを表し、侵略に対する防衛策は自己の強化以外にないと暗喩している。

七、二重政権（軍閥、土匪）の影響を共に受けた。これが七番目の誉め言葉。

古い租税を献上する上に、また巡警・保安・会・公司の料金を取られ、二重政権の重い税金により庶民の生活が苦しくなった、と指摘し、当時の混乱を極めた

社会状況を表し、民衆のために心を痛めるヘーシンゲーの思想が窺われる。
八、役に立たない道を閉じられた（新学が役に立たない道として閉じられたこと）。これが八番目の誉め言葉。
孔子は民衆を「由らしむべし、知らしむべからず」と言った。何年間の混乱、この八年間の惨殺、原因を探すと皆新学に対する闇から発生している。新学を知らなければ皆の心が乱れることはないと逆説を述べる手法をとって、実は民衆には新学の教育が必要であることを強調し、新学により民衆が救われることを表している。
九、モンゴル人の謙虚な我慢が増えた。これが九番目の誉め言葉。
世間のことに手を出さず、漢人官僚と付き合う役人は何事にも唯々諾々と譲歩し、農業・商業で損害を受けてもみな寛容に我慢しているのは誉めるべきだ、と述べるが、実はチンギス・ハーン時代の英雄的モンゴル民族は何故現状のような状況になり、脆弱化したかという民族意識に心を痛め、モンゴル民衆は立ち上がるべきだという意識を強く伝えている。
十、「有名な国」の仲間にまもなく入るだろう。これが十番目の誉め言葉。
「有名な国」とはインドとエジプト、ポーランド、ベトナム、朝鮮である。全部歴史上の亡国で「有名な国」になるであろう。現在我々は祖先と比肩する所まではいかないが、以上の「有名な国」と命運は同じであると述べ、モンゴル民族の未来を憂慮し、チンギス・ハーン時代の勇敢なモンゴルエイマグに思いをよせ、モンゴルの再興を望んだ。

この文章は賛美と言っても、実は逆に風刺する手法を使っており、行間には当時のヘーシンゲーのモンゴル民族意識、啓蒙思想が濃厚に反映されているといえよう。

3.4 「警世詩②」 "Olan–daγan sanaγulqu yariγ üges"[59]

「警世詩□」"Olan daγan sanaγulqu yariγ üges"の具体的な内容を翻訳すると次のようである。

みんなの習慣。今の幸福に浸って、後の備えを忘れている。これは消極的で、早く改めるべし。
みんなの習慣。自分の利益だけを考えて、皆のことをゆるがせにする。これは恥ずかしきこと。公私の利益は一つにすべし。
みんなの習慣。安逸を貪り、艱難辛苦を嫌がっている。これは退廃。常に猛省すべし。
みんなの習慣。若い頃努力をせずに、歳をとって臍を噛んでいる。これは愚昧。すぐに全て着手すべし。
みんなの習慣。三日坊主。これは笑止千万。常に注意すべし。
みんなの習慣。他人にむやみに新しいものを賞賛し、古きものを貶める。これは奇怪なり、よく分別すべし。
みんなの習慣。他人をむやみに説教するが、自分は茶を濁す。これは奇怪なり、よく考えるべし。
みんなの習慣。勤勉な学者に嫉妬し、自分は勉学を怠ける。これは軽蔑すべし、捨てるべし。
みんなの習慣。向上している人を妬み、衰退している人を助けない。これは愚かだ。すぐやめるべし。
みんなの習慣。法螺を吹き、嘘つきを誉めて、誠実な人を悪く言う。これも愚昧なり、よく考えるべし。

以上のように、ヘーシンゲーはモンゴル人が目の前だけを見て、未来を考えることができない恐れがあること、向上心と努力とが足りないことなどの具体的な悪い習慣を指摘しながら、この悪習を矯正すべきだと主張した。ヘーシンゲーはモンゴル民衆を教育することによりモンゴル民族の未来を心より願っていたと考えられる。モンゴル民族の未来のため、他民族に同化されないため、振興するためにはモンゴル民衆はどうするべきか、ということに対して、モンゴル人なりの倫理資質を生かして、一生懸命に努力することを主張した。
教育を重視し、教育により民衆を啓蒙し、民族を救いたいと願ったヘーシンゲーの文章の中に脈打っているこの思想は、当時の啓蒙思想を持つ新しいタイプのモンゴルの知識人たちにも共通するものであった。

おわりに

モンゴル民族の啓蒙思想とモンゴルの知識人たちの果たした役割について深く探求することは、内モンゴルの近現代教育、出版事業と民族運動を認識する上で極めて重要である。また、これらは内モンゴル人のナショナリズム形成との関係、日本と中国の内モンゴルに対する文化・教育政策を理解することにおいても有意義である。すなわち、モンゴルの知識人の活動に対する分析を通して、モンゴル人のナショナリズム形成の社会的背景を究明することにも有効であると言える。同時に、モンゴルの文化・教育・出版事業の発展、モンゴル民族ナショナリズムに対する知識人たちの役割を今後更に明らかにすることが現在のモンゴル文化の発展についても重要なことであると思う。

本稿はヘーシンゲーの経歴と『奉天蒙文報』に載せた彼の作品を中心に、彼のモンゴル民族思想について分析し、当時のモンゴルの知識人たちの思考の軌跡を一面から検討した。

ヘーシンゲーの作品には社会進化論、優勝劣敗の思想がすでに反映されているということが明らかになった。また当時、モンゴル人が同化される危険性を痛感したヘーシンゲーはモンゴルの文化・教育活動の充実、モンゴル民衆の意識の啓蒙が非常に切実な問題であり、これがモンゴルの未来と関わる重大なものであると非常に強調し、モンゴル民衆を呼び起こす努力をした。ヘーシンゲーのこれらの作品では彼のモンゴル人としてモンゴル民族の未来をめざし、努力するべきという思想が強く浮き出ている。これは当時の国際環境、近代世界の中でモンゴル民族として生き残るために心を痛め、努力したモンゴルの知識人の共通の姿を良く示すものであると言えよう。

注

1 克・莫日根『克興額―― 一个科尔沁蒙古人』内蒙古教育出版社、2001年。
2 色道尔吉（1925～1996年）、ジリム盟ダルハン旗（現在の科左中旗）出身。モンゴル民族文学家である。(『色道尔吉文集』内蒙古人民出版社、1999年)
3 色道尔吉の「克興額及其作品」 (1995年)という文章が、中国蒙古文学学会の論文集『蒙古文学研究』(第3輯、1996年）に収録された。(同上387頁)
4 Inǰanasi（インジャーナシ、1837～1892年）は清朝モンゴル民族著名文学家。『青史演義』、『一層楼』、『泣紅亭』など著作がある。(道・徳力格尔倉『尹湛納希詩歌研究』内蒙古人民出版社、1987年)
5 忒莫勒「克興額考辨」『蒙古学信息』内蒙古社会科学院歴史研究所、1997年。
6 忒莫勒「『克興額―― 一个科尔沁蒙古人』纠谬」『辽宁博物馆』第一辑、辽海出版社、2006年。
7 Erdenidoγtaqu, *Mongγol ündüsüten-ü suγan kümüǰil-ün bičig barimta-yin emkidkel,* Öbör mongγol-un suγan kümüǰil-ün keblel-ün qoriγ-a ,1983 .p3～17。
8 Ü.Šuγar-a, *Mongγol ündüsüten-ü orčin üy-e-yin uran ǰokiyal-un teüke,* Öbör mongγol-un yeke suγaγuli-yin keblel-ün qoriγ-a, 1987.
9 B.Gereltü *suγu-yin noγuγ-a,* Öbör mongγol-un arad-un keblel-ün qoriγ-a, 1998.p140。
10 Söyüge, *Mongγol ündüsüten-ü odo üy-e-yin utq-a ǰokiyal-un teüke,* Öbör mongγol-un yeke suγaγuli-yin keblel-ün qoriγ-a, 2008.p139～144。
11 Futaki・Hirüsi,"Sin-e-ber oldaγsan kesingge-yin bütügel", *Öbör mongγol-un neyigem-ün sinǰilekü uqaγan,* 2002.No116. *Mongγolčud-un teüke soyol-un öb-i möskiküi,* Ulaγanbaγatur, 2002.
12 後に奉天第四中学と改称された。
13 克・莫日根、前掲『克興額―― 一个科尔沁蒙古人』、15～17頁。
14 奉天にいる学友の王東藩に手紙を送り、英語の教員に聘請した。王東藩は夏休みの二ヶ月学校に来て、学生の英語を教えた。この後ももう一人の学友の雷玉苓も夏休みに英語の教員になっていた（克・莫日根、前掲『克興額―― 一个科尔沁蒙古人』、24頁)。
15 同上27頁。

16 同上、220 頁。1923 年国会で、曹錕が一票 5000 銀元で国会議員を売収し、大総統に当選した選挙のことを指す。
17 同上、220 頁。
18 同上 81～82 頁。
19 同上、84～85 頁。
20 同上、75～76 頁。
21 内蒙古社会科学院歴史研究所『蒙古学信息』、1997 年、第 4 期。
22 奉天（現在の瀋陽）は当時東北地方の文化的中心地であり、モンゴル文化人が集った都市でもあった。
23 達瓦傲斯尓「東蒙書局与其出版事業」『内蒙古文史資料第 27 輯』、1987 年、210 頁。
24 『満蒙漢三体合璧教科書』のこと。
25 『初学国文』八冊のことを指している。
26 ロルガルジャブ（1888～1941 年）、ヘシグテン旗出身。外モンゴル自治政府内政部／1917 年輔国公、奉天督軍署諮議官、1928 年蒙古文化促進会副会長、1929 年同旗ジャサク／満洲時代、1933 年民政庁長、1937 年興安西省所長、1941 年病死。
27 ヘーシンゲーはロルガルジャブと二人で『初学国文』を編集審査して出版した。
28 克・莫日根、前掲『克興額—— 一个科尔沁蒙古人』、39 頁。
29 同上。
30 満州国国務院総務庁情報処『蒙旗行政制度改革記念特刊』、康徳元(1934)年、4～5 頁。
31 1937 年 5 月まで、興安各分省のモンゴル民族学校で主に使用されていたのは満洲国建国前に東蒙書局から出版されたモンゴル語の教科書だった。
32 蒙政部民政司「康徳五年旗長及旧蒙古王侯代表会議議事録」、康徳五(1938)年、5 頁、遼寧省档案館：日文ー行政—1028。また遼寧省档案館編『溥儀私蔵偽満秘档』も傍証になる。
33 凌陞事件により、モンゴル側の意見を押さえ込んだ満洲国政府は、それ以降、モンゴル側がそれまで土地に対して有していた諸権利関係を整理してゆき、これを国家に移譲させることに成功する。当時、これを「蒙地奉上」と呼んだ。（広川佐保『蒙地奉上——「満州国」の土地政策——』汲古書院、2005 年、2 頁 ）。
34 蒙民厚生会の理事長にはシューミンガ、理事にマニバタラが就任。
35 『蒙文補助読本』（*mongγol utq-a-yin nökübüri bičig*）（上、下冊）を 1944 年に出版した。
36 第 8 課 “Terigülegči čečeg”、 第 14 課 “Činggis-ün maγtaγal”、第 17 課 “Dörben čaγ-un maγtaγal”、 第 24 課 “Fu ting abuγai-dur tayiγsan bičig”、 第 26 課 “Sula bičigsen anu”、 第 27 課 “Gegen-dür mörgüged bičigsen anu” 、第 29 課 “Emünetü γorlus-dur toγorir-a oduγsan temdeglel” である。
37 北京図書館出版社、1997 年。
38 Futaki・Hirüsi,前掲 “Sin-e-ber oldaγsan kesingge-yin bütügel”
39 同上。
40 中島真雄『不退庵の一生』我観社、1945 年、45 頁。
41 「外モンゴル内部は心を一つにして力を合わせるべきことを論じる」という文章。この文章ではモンゴル民族と漢民族の関係について現状を述べ、モンゴル民族は統一し、自立するべきことを中心に論じている。ロシアの立場で書かれたこの文章は当時の日本の観点と共通していることで、この文章をこのままに掲載したのであろう。
42 Futaki・Hirüsi, 前掲 “Sin-e-ber oldaγsan kesingge-yin bütügel”
43 中島真雄、前掲『不退庵の一生』、45 頁。
44 二木博史「ボヤンマンドフと内モンゴル自治運動」『東京外国語大学論集』第 64 号、2002 年。
45 ヘーシンゲーは蒙文翻訳館長として会議を主催し、ボヤンマンダフは興安南省省長として発言した（『青旗』第 64 号、1942 年 6 月 6 日）。
46 二木博史、前掲「ボヤンマンドフと内モンゴル自治運動」70～71 頁。
47 大倉組、奉天新站東洋拓殖株式会社、朝鮮銀行鄭家屯支店、奉天附属地南満洲製糖株式会社、マンシュインタリアウイドブリプス（満洲の農業店）、横浜正金銀行奉天支店。
48 横浜正金銀行奉天支店の宣伝である。
49 田中比呂志「近代中国の国民国家構想とその展開」（久留島浩、趙景達編『アジアの国民国家構想——近代への投企と葛藤』青木書店、2008 年、120～141 頁）。
50 同上。

51 同上。
52 1912年、ヘーシンゲーは奉天蒙文学堂を卒業し、専職編集員として奉天市翻訳書記(組織の責任者)として勤め始めていた。(克・莫日根、前掲『克興額— 一个科尔沁蒙古人』19頁。忒莫勒「『克興額—— 一个科尔沁蒙古人』纠谬」『辽宁博物馆』第一辑、辽海出版社、2006年。)
53 克・莫日根、前掲『克興額— 一个科尔沁蒙古人』96～97頁。『奉天蒙文報』、1920.5.15.
54 『奉天蒙文報』39期、1920.5.3、第1頁の「論述文(Sigümǰilel ügülel)」のコーナーに掲載された。著者の名前はビントーン＝ヘーシンゲーと書いている。
55 『奉天蒙文報』第26期、1919.2.1.
56 kümüǰimüi と kümürigdeküi を指している。
57 1919年2月15日の『奉天蒙文報』第28期で 発表された。
58 仏教の一種類であるチベット仏教（ラマ教）のこと。
59 1919年6月28日の『奉天蒙文報』第47期に発表された。

参考文献（モンゴル語・中国語文献に限った）

モンゴル語

Mongγol ündüsüten–ü orčin čaγ–un silüg–ün sungγumal, Öbör mongγol–un suryan kümüǰil–ün keblel–ün qoriy–a ,1980

Erdenidoγtaqu, *Mongγol ündüsüten–ü suryan kümüǰil–ün bičig barimta–yin emkidkel,* Öbör mongγol–un suryan kümüǰil–ün keblel–ün qoriy–a ,1983

Ü.Šuγar–a, *Mongγol ündüsüten–ü orčin üy–e–yin uran ǰokiyal–un teüke,* Öbör mongγol–un yeke suryaγuli–yin keblel–un qoriy–a, 1987

Aγula, "Mongγol soyol–un ǰidkülten Kesingge" *Öbör mongγol–un baγsi–yin yeke suryaγuli–yin erdem sinǰilegen–ü sedkül,*1989.9

Batüsüke, "Kesingge abuγai–yin mendülegsen 100 ǰil–un oi–yi durasqaba" *Öbör mongγol–un edür–ün sonin*, No13343,1989

Či yüwe, "Kesingge abuγai–yi duratqaqu ǰaγun ǰil–un oi–yin durasqan temdeglekü quraldaγan kibe" *Öbör mongγol–un nom–on sang–un aǰil,* 1990

Ü.Šuγar–a, "Kesingge–yin nige sigümǰi nayiraγulol–un tuqai"*Mongγol kele bičig,* 1990.7

B.Gereltü *Suγu–yin noγuγ–a,* Öbör mongγol–un arad–un keblel–ün qoriy–a, 1998

Futaki・Hirüsi , "Sin–e–ber oldaγsan kesingge–yin bütügel", *Öbör mongγol–un neyigem–ün sinǰilekü uqaγan,* 2002.No116

Futaki・Hirüsi , "Sin–e–ber oldaγsan kesingge–yin bütügel", *mongγolčud–un teüke soyol–un öb–i möskiküi,* Ulaγanbaγatur, 2002

Altandalai, *Yapon ba öbör mongγol,* Öbör mongγol–un suryan kümüǰil–ün keblel–ün qoriy–a , 2004

Söyüge, *Mongγol ündüsüten–ü odo üy–e–yin utq–a ǰokiyal–un teüke,* Öbör mongγol–un yeke suryaγuli–yin keblen–un qoriy–a, 2008

S.Urasqal, "20 duγar ǰaγun–u mongγol utq–a ǰokiyal–un teüke sudulul–un aγulγ–a kiged kebsil" *Öbör mongγol–un neyigem–ün sinǰilekü uqaγan,* 2008.No155

Čilaγu, "Orčin üye–yin mongγol utq–a ǰokiyal–un soyon gegeregülkü üǰel urasqal–un tuqai sudulul" *Öbör mongγol–un yeke suryaγuli–yin erdem sinǰilegen–ü sedkül,* 2009.4

S.Urasqal, "Kesingge–dü qolboγdaqu kedün asaγudal–un tuqai", *Öbör mongγol–un yeke suryaγuli–yin erdem sinǰilegen–ü sedkül,* 2009.4

中国語

仁钦莫德格「沈阳东北蒙旗师范学校」『内蒙古文史资料』第23辑、1986年
忒莫勒「克興額考辨」『蒙古学信息』第4号、1997年

達瓦傲斯尔「東蒙書局与其出版事業」『内蒙古文史資料第 27 輯』、1987 年
――――「在瀋陽的見聞――克興額与東蒙書局」『内蒙古文史資料第 31 輯』、1988 年
敖日其楞「谈蒙古族民族意识的发展问题」『内蒙古社会科学』第 5 期、1988 年
王野平『東北沦陷十四年教育史』吉林教育出版社、1989 年
那木海札布「回憶“泰賚会議”前後」、内蒙古自治区文史資料委員会編『偽満興安史料』、1989 年
那木海札布、達瓦傲斯尔「参加“鄭家屯会議”的回憶」 内蒙古自治区文史資料委員会編『偽満興安史料』、1989 年
「“蒙地奉上”与“蒙民厚生会”」内蒙古自治区文史資料委員会編『偽満興安史料』、1989 年
楚克「関於蒙古族近代思想啓蒙運動的幾個問題」『内蒙古社会科学』第 1 期、1990 年
『内蒙古文史資料第 44 輯』 内蒙古自治区文史資料委員会、1993 年
烏蘭図克「中国国民党的対内蒙古政策」『内蒙古近現代史論叢』内蒙古人民出版社、1994 年
忒莫勒「克興額考辨」『蒙古学信息』第 4 号、内蒙古社会科学院歴史研究所、1994 年
郝維民『内蒙古革命史』内蒙古大学出版社、1996 年
烏蘭図克「内蒙古自治区民族教育最突出的問題――其産生原因及対策」『民族教育研』第 2 期、1997 年
金海「从地域概念看日本“満蒙政策”的演変及其実質」『内蒙古大学学報』第 2 期、1997 年
栄蘇赫、趙永銑『蒙古族文学史（第 4 巻）』内蒙古人民出版社、1999 年
郝維民『百年風雲内蒙古』内蒙古教育出版社、2000 年
克・莫日根『克興額―― 一个科尔沁蒙古人』内蒙古教育出版社、2001 年
色道尔吉『色道尔吉文集』内蒙古人民出版社、2001 年
何金山、特木尔巴根「試析清末蒙古王侯興辦実業的新思想」『内蒙古大学学報』第 5 期、2003 年
金海『日本占領時期内蒙古歴史研究』内蒙古教育出版社、2005 年
忒莫勒「『克興額―― 一个科尔沁蒙古人』纠谬」『辽宁博物馆』第 1 辑、2006 年
――――「喀喇沁克興額与蒙文鉛字」『内蒙古師範大学学報』第 1 号、2006 年
賽航、金海、蘇徳畢力格『民国内蒙古史』内蒙古大学出版社、2007 年
任翔『历史见证博彦满都』名人出版社、2008 年
忒莫勒「民国年間蒙古人士在瀋陽的文化活動」『辽宁省博物馆馆刊』第 3 辑、辽海出版社、2008 年